

宮本武蔵(一)



吉川英治全集

第17卷

川端 康成

小泉 信三

小林 秀雄

佐佐木茂索

獅子 文六

講談社版

著作権者の了解
により検印廃止

吉川英治全集・17 宮本武蔵(一)

著者 吉川英治

装幀者 杉本健吉

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―二―二(大代表) 郵便番号 一―二―
電話 東京九四二局 二二二〇 振替 東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大製株式会社
本文用紙 日本バルブ工業株式会社特選

第一刷発行 昭和四十三年九月二十日

定価 六百八十円

© 一九六八年 吉川英治

序

初版が出たのさえ十数年前だった。起稿を思い立った日からでは、もう、二十年ちかい歳月がながれている。

この書が、装幀を新に、版をかさねて出るとなると、いつも私は過去茫々の想いにたえない。じつに世のなかはその間にすら幾変りも変遷してきた。

さる人が私に云った。「あなたの宮本武蔵はもう古典ですよ、一つの古典として在るわけでしよう」と。なるほど、そんなものかもしれないと私も苦笑した。それならそれで望外なことだとおもう。

だが、何しろ作家としては、二十年ちかくも年をけみしてみると、今日では自分ながら意にみたない所も多く、わけて心の未成熟な自己のすがたが眼につくのであるが、しかしこれはこれなり私というものの全裸な一時代の仕事であったことにまちがいはない。後にどうつくろうべきものでもなからう。唯、時の流れと、時評の是々非々と、そして読者の需めにまかせるのみである。

昭和二八・晩秋

著 者

はしがき

——「旧序抄の」

宮本武蔵のあるいた生涯は、煩惱と闘争の生涯であつたといえよう。もちろん世代は遠く違ふが、その二点では現代人もおなじ苦悩をまだ脱しきれてはいない。武蔵のばあいは、しかし、もつとも闘争社会の赤裸な時代であつた。そして当然、かれも持つ本能の相のまま、なやみ、もがき、猛り泣いて、かかる人間宿命を、一箇の剣に具象し、その修羅道から救われるべき「道」をさがし求めた生命の記録が彼であつたのだ。ということには、たれも異論はないと思う。

人間個々が、未生からすでに宿してきた性慾、肉体の解決という課題が、文学の大事ならば、同列の人間宿命といひする闘争本能の根体を究明してゆくことも、大きな課題といつてよい。

主題の人間武蔵は、まちがいなく、その本能苦と闘つたものである。この無限にさえ見える宿命苦をふくめた宇宙が彼の住みかであり、一本の針にもたらないその剣は、かれの心の形象にすぎない。かれが求めた闘争即菩提——闘争即是道の道にすぎない。

影響を私はおそれる。影響に私は臆病である。私は、道学者じゃないが、それに思いおよぶと、細心になつてしまふ。

かりそめの一小説も、ときには、読者の生涯を左右する。

自分の書くものが、文学であり得る、文学でなくなる、そんな問題よりずっと上に、読者への影響いかんがまず位置している。それが自分の文学態度だといえるほどに。

もとより初めから興味中心でかいたものには、私としてそんなにまで決して潔癖でもないが、この書には特に、煩^{わづ}いがちなのである。

多年、この作品を介^かして、著者へよせられた読者の垂愛^{すいあい}にたいして、私はそうならずにいられないとみえる。

一例にすぎないが、京都の桜^{さくら}の画家^がといわれた故K・U氏は、生活苦のはて、一家心中^{かしたんじゆう}をこころにきめた日、稀^{なま}々、その日の夕刊に、武蔵が朝熊山^{あさまやま}をのぼる一章^{しやう}を読み、死をおもいとどまったのでしたと、後に朝日のT学芸部長を通じて、私を訪^とわれて語られたことなどある。水泳^{すいえい}の古橋選手も、将棋の升田八段も、この書のどこかを自身の精進^{しやうじん}に生かし得たということを、人づてに聞かされました。こういうとき、私は、よろこびと張合を感じもするが、より以上、苦痛にも似た自責をおぼえないではいられない。

さきに影響といったが、読者が、作家に与える影響というものもありうる。あるいは、いつかしら、私は多分に、読者から影響されていた者かも知れない。

大衆のなかに机をおき、大衆の精神生活と共にあらうとする文学の業^{わざ}は、孤高^{ここう}の窓^{まど}で蘭^{らん}を愛するようなわけにゆかないのがほんとだろう。ほんとに権化^{ごんげ}したらもっと恐^{こわ}い宿命の文学かも知れないのだ。

宮本武蔵の疑義されやすい点は、そして時には書評的な誤解をうけるのも、剣に象徴された人間や、封建の種々相などにあるのであろう。けれど正しい志向のもとに今日の世界観、社会観をもって来た読者には、もう剣なるものが過まる憂いなどはないものと信じる。読者は娯楽するところに娯楽し、夢みるところに夢み、現実^{しやうじつ}に照合しながら、読書味の自由に遊ぶのではないかとおもう。

もとより武蔵の剣は殺でなく、人生呪咀でもない。

護りであり、愛の剣である。自他の生命のうえに、きびしい道德の指標をおき、人間宿命の解脱をはかった、哲人の道でもある。

画人としての武蔵、文雅の余技面の彼は、その晩年期なので、小説宮本武蔵のうえでは、武蔵野屏風を描いたこととか、観音像の彫刻をした程度の、初期の文化的知性の芽ばえしか出ていない。

またかれの恋愛なども、かれとしての一型であって、強いたり教えたりしているものではない。然し、現代の恋愛観の相映鏡にはなるであらう。合せ鏡に焦点をとらえる角度は、たれにでも自由である。

かれの姿を、現代と昔との二面鏡にとらえてみても、彼の剣が単なる兇器でないことは誰にも分ることとおもう。

旧序

宮本武蔵は、いつか一度は書いてみたいとのぞんでいた人物の一人であった。それを、東西兩朝日新聞の紙上によって、一日々々、思いを果すような気持で構成して行ったのが、この書である。

わたしたち民衆のあいだに、宮本武蔵という名は、すでに少年の頃から親しみのなかにあったものだが、それは古い戯曲や旧時代の読本などで、あまりに誤られてゐる変形のまぼろしであり、ほんとの宮本武蔵という人の心業は、ああいふ文芸からは、片鱗もうかがうことはできない。

近年、宮本武蔵のあるいた生涯——「剣から入った人生の悟道」とか「人間達成への苦闘のあと」などが、まじめに考え出され、それがひとつの「武蔵研究」となつてあらわれ、また美術史家たちの詮索による、彼の絵画史研究などもすすめられて来てはいるが、私のこの書は、もとより小説宮本武蔵である。学究的なそれではない。

といつて、武蔵という人間の片鱗もない戯作には私とて不満であるし、また新に書いても意味はない。書くからには、かつての余りに誤まれていた武蔵観を是正して、やや実相に近い、そして一般の近代感とも交響できる武蔵を再現してみたいという希いを私はもった。——それと、あまりにも繊細に小智にそして無氣力に墮している近代人的なものへ、私たち祖先が過去には持っていたところの強韌なる神経や夢や真摯な人生追求をも、折には、甦えらせてみたいという望みも寄せた。とかく、

前のめいに行き過ぎやすい社会進歩の習性にたいする反省の文学としても、意義があるのではあるまいか、などとも思った。それらが、この作品にかけた希いであった。

だが、どの程度まで、それが達しられたであろうかは、私にはわからない。ただ、これが新聞のうゑに掲載中は、不才のわたくしを鞭撻してくれた読者諸氏の望外な熱情と声援には、その過大にむしるわたくしは惧れたほどだった。新聞小説を書いて、未知辱知の人々から、こんなにも夥しい激励やら感想をうけた例は、今日までの私にはないほどだった。

また特に、記しておきたいのは、武蔵に関する郷土史料や記録などを、執筆中、絶えまなく寄せてくれた多くの未知の人々の好意である。それがどれほどわたくしのせまい知識をたすけてくれたことが知れない。

火 水 地 序
の の の
卷 卷 卷 目
次

二四七 101 三

宮
本
武
藏
(一)

地
の
巻

鈴

一

——どうなるものか、この天地の大きな動きが。

もう人間の個々の振舞いなどは、秋かぜの中の一片の木の葉でしかない。なるようになってしまえ。

武蔵は、そう思った。

屍と屍のあいだにあって、彼も一個の屍かのように横たわったまま、そう観念していたのである。

『——今、動いてみたって、仕方がない』

けれど、実は、体力そのものが、もうどうにも動けなかったのである。武蔵自身は、気づいていないらしいが、体のどこかに、二つ三つ、銃弾が入っているに違いなかった。

夜半から明け方にかけて、この関ヶ原地方へ、土砂ぶりに大雨

を落した空は、今日の午すぎになっても、まだ低い密雲を解かなかった。そして伊吹山の背や、美濃の連山を去来するその黒い迷雲から時々、サア——と四里四方にもわたる白雨が激戦の跡を洗ってゆく。

その雨は、武蔵の顔にも、そばの死骸にも、ばしやばしやと落ちた。武蔵は、鯉のように口を開いて、鼻ばしから垂れる雨を舌へ吸いこんだ。

——末期の水だ。

痺れた頭のしんで、かすかに、そんな気もする。

戦いは、味方の負けと決まった。金吾中納言秀秋が敵に内応して、東軍とともに、味方の石田三成をはじめ、浮田、島津、小西などの陣へ、逆さに戈を向けて来た一転機からの総くずれであった。たった半日で、天下の持主は定まったといえる。同時に、何十万という同胞の運命が、眼に見えず、刻々とこの戦場から、子々孫々までの宿命を作られてゆくのであろう。

『俺も、……』

と、武蔵は思った。故郷に残してある一人の姉や、村の年老などのことをふと眼に泛べたのである。どうしてであろう、悲しくもなんともない。死とは、こんなものだろうかと疑った。だが、その時、そこから十歩ほど離れた所の味方の死骸の中から、一つの死骸と見えたものが、ふいに、首をあげて、

『武やアン！』

と、呼んだので、彼の眼は、仮死から覚めたように見まわした。

棺一本かついだきりで、同じ村を飛び出し、同じ主人の軍隊に従いて、お互が若い功名心に燃え合いながら、この戦場へ共

に来て戦っていた友達の又八なのである。

その又八も十七歳、武蔵も十七歳であった。

『おうっ。又やんか』

答えると、雨の中で、

『武やん生きてるか』

と、彼方で訊く。

武蔵は精いっぱいな声でどなった。

『生きてるとも、死んでたまるか。又やんも、死ぬなよ、犬死するなっ』

『くそ、死ぬものか』

友の側へ、又八は、やがて懸命に這って来た。そして、武蔵の手をつかんで、

『逃げよう』

と、いきなりいった。

すると武蔵は、その手を、反対に引っぱり寄せて、叱るよう

に、

『——死んでろっ、死んでろっ、まだ、あぶない』

その言葉が終らないうちであった。二人の枕とにいる大地が、釜のように鳴り出した。真つ黒な人馬の横列が、喊声をあげて、関ヶ原の中央を掃きながら、此方へ殺到して来るのだった。

旗差物を見て、又八が、

『あつ、福島の子だ』

あわて出したので、武蔵はその足首をつかんで、引き伏した。

『ばっか、死にたいか』

——一瞬の後だった。

泥によこれた無数の軍馬の脛が、織機のように脚速をそろえて、敵方の甲冑武者を騎せ、長槍や陣刀を舞わせながら、二人の顔の上を、躍りこえ、躍りこえして、駆け去った。

又八は、じっと俯伏したきりでいたが、武蔵は大きな眼をあいて、精悍な動物の腹を、何十となく、見ていた。

二

おとといからの土砂降りは、秋暴れのおわかれだったとみえる。九月十七日の今夜は、一天、雲もないし、仰ぐと、人間を睨まえているような恐い月であった。

『歩けるか』

友の腕を、自分の首へまわして、負うように援けて歩きながら、武蔵は、たえず自分の耳もとでする又八の呼吸が気になつて、

『だいじょうぶか、しっかりしておれ』

と、何度もいった。

『だいじょうぶ!』

又八は、きかない氣でいう、けれど顔は、月よりも青かった。

ふた晩も、伊吹山の谷間の湿地にかくれて、生粟だの草だのを喰べていたため、武蔵は腹をいたくしたし、又八もひどい下痢をおこしてしまった。勿論、徳川方では、勝軍の手をゆるめずに、関ヶ原崩れの石田、浮田、小西などの残党を狩たてているに違ひはないので、この月夜に里へ這いだしてゆくのは、危険だという考えもなかったが、又八が、

（捕まってもいい）

「というほどな苦しみを訴えて迫るし、居坐ったまま捕まるのも能がないと思って決意をかため、垂井の宿と思われる方角へ、彼を負って降りかけて来たところだった。」

「又八は、片手の槍を杖に、やっと足を運びながら、

『武やん、すまないな、すまないな』

友の肩で、幾度となく、しみじみいった。

『何をいう』

武蔵は、そういつて、暫らくしてから、

『それは、俺の方でいうことだ。浮田中納言様や石田三成様が、軍を起すと聞いた時、おれは最初しめたと思った。——おれの親達が以前仕えていた新免伊賀守様は、浮田家の家人だから、その御縁を持んで、たとえ郷士の倅でも、槍一筋ひっさげて駆けつけて行けば、きつと親達同様に、士分にして軍に加えて下さると、こう考えたからだ。この軍で、大将首でも取って、おれを、村の厄介者にしてゐる故郷の奴らを、見返してやろう、死んだ親父の無二斎をも、地下で、驚かしてやろう、そんな夢を抱いたんだ』

『俺だって！……俺だって』

又八も、頷き合つた。

『で——俺は、日頃仲のよいおぬしにも、どうだ、ゆかぬかと、すすめに行つたわけだが、おぬしの母親は、どんなでもないことだと俺を叱りとばしたし、また、おぬしとは許婚の七宝寺のお通さんも、俺の姉までも、みんなして、郷士の子は郷士でおれと、泣いて止めたものだ。……無理もない、おぬしも俺も、かけ更えのない、跡とり息子だ』

『うむ……』

『女や老人に、相談無用と、二人は無断で飛び出した。それまでは、よかつたが、新免家の陣場へ行ってみると、いくら昔の主人でも、おいそれと、士分にはしてくれない。足輕でもと、押売り同様に陣借して、いざ戦場へと出てみると、いつも姦見物の役や、道ごさえの組にばかり働かせられ、槍を持つより、鎌を持って、草を刈つた方が多かつた。大将首はおろか、士分の首を獲る機もありはしない。そのあげくがこの姿だ、しかし、ここでおぬしを犬死させたら、お通さんや、おぬしの母親に何と、おれは謝まつたらいいか』

『そんなこと、誰が武やんのせいにするものか。敗け軍だ、こうなる運だ、何もかも滅茶くそだ、しいて、人のせいにしたら、裏切者の金吾中納言秀秋が、おれは憎い』

三

程経てから二人は、曠野の一角に立つてゐた、眼の及ぶかぎり野分の後の萱である、灯も見えない、人家もない、こんな所を目ざして降りて来たわけでないはずだがと、

『はてな、此処は？』

改めて、自分たちの出て来た天地を見直した。

『あまり、喋舌つてばかり来たので、道を間違えたらしいぞ』

武蔵が、つぶやくと、

『あれは、杭瀬川じゃないか』

と、彼の肩にすがつてゐる又八もいう。

『すると、この辺は一昨日、浮田方と東軍の福島と、小早川の軍と敵の井伊や本多勢と、乱軍になつて戦つた跡だ』